

リン・ウェバー！
ワークシヨップ代表

ダグラス ウェバー氏

肖像

九州・沖縄

世界中のバリスタがほれ込むコーヒーグラインダー（豆ひき）が福岡県糸島市の山奥で設計・開発されている。米アップルをやめ「第2の母国」日本で起業した米国人デザイナーエンジンニア、ダグラス・ウェバー(39)は、衰退する「モノづくり大国」に新風を吹き込もうと奮闘している。

駐米家族と交流 日本に関心抱く

「すごく甘いでしょ」。自らひいた豆で抽出したエスプレッソを前に、ウェバーは流ちょうな日本語で誇らしげに語る。赤く完熟したコーヒーの実は「チェリー」と称されるように、本来は砂糖なしでも甘みがある。「焙煎（ばいせん）やひき・抽出が悪いから、単なる苦い飲み物になってしまっているんですよ」

グラインダーの精度が高くひき残りが無い。工具不要で分解でき古い粉が残らない。性能の高さと機能美が評判を呼

元アップル、コーヒーに挑む



び、2016年にネットで発売すると約10万円の手動グラインダーが2千台、約35万円の電動タイプは200台売れた。製品を手にとって見られ

るよう、2月にカフェを福岡市・薬院で開く準備中だ。1980年代後半、ロサンゼルス郊外。生まれ育った街には日本から多くの駐在員家

族が来ていた。一番仲が良かった「田中くん」とは、「毎日コロコロを読んだり、スーファミで遊んだり……」。流ちょうな日本語のゆえんだ。

バブル崩壊とともに親友一家は帰国したが、日本への関心は抱き続けた。名門スタンフォード大に進学し、3年時には京都大に交換留学。帰国後、アップルから採用オファーを得たものの、「働く前にもう一度」との思いで奨学金を得て九州大に留学した。

知り合った居酒屋店主が糸島に陶芸工房を持っていた。週3度通い作陶に没頭。1年で200点を焼いた。「日本を離れる直前に個展を開いて、全て売っ払いました」

吹っ切れたウェバーは02年にアップルに入社。株価は1ドル台で低迷し「社の歴史のほどんどん底」。だがその分「なんでもできそう」。直感的に中し、入社すぐ携帯音楽プレーヤー「iPod nano」

Douglas Weber 1979年(昭54年)、米カリフォルニア州出身。スタンフォード大工学卒、米アップル入社。プロダク

のチームに初期メンバーとして配属。どう組み立てれば最も薄くできるか、機構設計から素材選択まで考え抜いた。5年ほどたち、日本で働きたいの思いが再燃する。そこで日本の中小企業に眠る技術を掘り起こし、アップル製品の開発に役立てることを提案。「日本語で技術が話せるのは自分だけ」と手を挙げた。

50年残る機械

糸島から世界へ

素材でも加工手法でも、展示会やカタログで気になった企業には片っ端から電話をかけ、全国の工場を訪ね歩いた。確信したのは「油くさいところに入っていないか」と、信頼されないビジネスもできない」ということだ。現在も採用されている、ディスプレイに指紋を付きにくくする技術の開発など成果を上げた。

同時にアップルに対する「満腹感」も感じていた。転換点と振り返るのは07年、「iPhone」の発売。「規模がとてつもなくでかくなり、自分の会社じゃない感じがした」。株価は100ドルを超えた。

トデザインのアジアチーム責任者を務めた後、2014年独立。日本でリン・ウェバー・ワークシヨップ設立。

時価総額は最大に。「製品をスクラップする中国工場の想像を絶する現場」も目の当たりにした。スマートフォンのように数年で寿命がくるものではなく、子孫代々が使える製品をつくりたい。

人間の味覚は変わらず、半世紀たっても「おいしいものはおいしい」。テクノロジを生かして50年後も古びないものがつくれる。「機械と食」に可能性を感じ、14年に「リン・ウェバー・ワークシヨップ」を共同創業。かつて通いつめた糸島に居を構えた。

生産委託工場のある台北には、糸島を朝出れば昼前に着ける。だが「いつかは糸島に工場をつくって人も雇いたいんです」。モノづくり大国の復活を願い、今日もウェバーは「油くさいところ」を訪ね歩いている。

文中敬称略
西部支社 今堀祥和
写真 塩山賢